

宣教教会と民族意識の形成

タンザニアのマケテ県ルーテル教徒の動向

小泉 真理

の出来事に即しながら論じたい。

はじめに

1 キンガ人とキリスト教

植民地化や近代化という大きな歴史の流れの中で、アフリカ人の多くは既存の信仰からキリスト教あるいはイスラム教という世界宗教に改宗してきた。こうしたアフリカ社会の世界宗教への改宗は、多くの研究者によって論じられている。改宗現象の理論化を試みたホルトンは、その先駆的研究において、世界宗教への改宗は、地域に根差した伝統社会が、世界的な政治や経済活動に包括されてゆく状況の中で、人々が従来の小宇宙観に根差した信仰から大宇宙観をもつ世界宗教へと移行を求めた結果の現象であると、改宗における知的原因を強調した(Horton, Robin, "African Conversion," *Africa*, No.41, 1971, pp.87-108)。

本稿は、改宗の社会的原因に焦点をあて、タンザニア南西部マケテ県キンガ社会における改宗現象を分析しようとするものである。ついては、宣教教会とキンガ人との歴史的関係を明らかにし、社会のグローバル化という状況の中で、宣教教会を通じて自らのアイデンティティーを模索しようとするキンガ人の最近の動向について、タンザニア・ルーテル教会・南部組織(Evangelical Lutheran Church of Tanzania, Southern Region)の百年祭

キンガ人のキリスト教への改宗は、1895年にドイツのベルリン宣教団がやってきたことで始まった。その後100年の布教の歴史とともに、キリスト教への改宗者はさらに増加し、なかでも、私の滞在していたタンダラ村では、人口の80%以上が洗礼を受けたキリスト教徒であった。植民地化以前のキンガ社会は、タンザニア東部から移住してきた複数のクランによって構成され、各々有力なリーダーを有していた。サンガ・クラン、マハンジ・クラン、そしてマゴマ・クランの間では権力闘争が繰り返されて、現在でも、北部から中央および南東部地域はサンガ、西北部はマゴマ、西南部はマハンジ・クランの居住地になっている。

ドイツによる植民地化の進展とともに、サンガ・クランのリーダーであったムエムチがこの地域全体を司る者と見なされ、彼の下にキンガ首長国が認定された。その結果、サンガ・クランのチーフたちは植民地政府の役人として登用され、税金の徴収や争い事の審判という役目を担った。ほぼ同時に、ベルリン宣教団はウキンガ(キンガ人居住地)西部で布教活動を始め、マゴマやマハンジ・クラ

ンの反体制派チーフや、社会構造の中で弱い立場にあった女性や若者の間で改宗が進んでいった。多くの改宗者たちは宣教団の学校で学び、教会との関係を強めながら新しい知識を獲得した。宣教団は、その後次第に、布教活動をサンガ・クランの居住地域であるウキング中央部や南部へと拡大し、キリスト教化の促進に努めた。

植民地時代が終り、1961年にタンザニアにおける近代国家建設が始まると、キングの首長国体制は崩壊し、それまでの社会の権力構造は変容することになった。新政府は、教会で教育を受け読み書きができるマゴマやマハンジのチーフたちを優先的に政府役人に任命し、一方、ムエムチをはじめとしたサンガのチーフたちを、能力不足と見なして行政の役職から外した。そして、81年にタンザニア・ルーテル教会の南中央管区がマケテ県に設立されると管区の主な役職に多数のマハンジとマゴマ・クラン出身の牧師や長老が就いた。その結果、マハンジとマゴマ・クランの社会的地位は確かなものとなった。近年では、教会は、医療や教育活動に加え、牧畜や農業事業等さまざまな社会・経済活動を行なうようになり、キング人の生活と深く関わっている。教会活動をとおして政治や経済の分野で成功する者も増え、キリスト教は今や、キング人にとって、成功者あるいは勝利者を象徴するものとなっている。

2 キリスト教会百年の祭

1991年9月、タンザニア南部でルーテル教会が布教活動を始めて100年を祝う大集会が、隣のムベア県のマノウという町で開かれた。タンザニア南部におけるルーテル教会は、今日、北部のアルーシャに本部を置くタンザニア・ルーテル教会の支部となっており、この百年祭には、ダイオシスと

よばれる全国の教会管区からの牧師や信者に加えて、ヨーロッパ宣教団の代表などが多数出席した。2日間にわたった祝賀集会では、歴代のドイツ宣教師やアフリカ人の管区長(Bishop)たちが次々と祝辞を述べ、タンザニアにおけるルーテル教会の発展と展望について語った。そして、式典の最も重要な催しとして、各管区の代表による歌と踊りが披露された。南中央管区を頂くキング人は、彼らの管区長が式典の司会という大事な役目を担っていたこともあり、大変な意気込みでもって催しに参加した。

南中央管区では青年部聖歌隊の催しへの参加を決め、百年祭の半年以上前から代表選考会が開かれた。管区は六つの教区に分かれ、各々の教区の下には複数の教会が所属している。選考は各教区内の聖歌隊間での歌唱コンテストから始まり、その優勝者が教区の代表者として管区代表の座をかけて競うという形式が取られた。選考にあたっては“キングらしさ”が最も重要な点として審査されることが参加者に事前に伝えられていた。ある教区の代表は、その日のために民族衣装の復元を行ない、男性メンバーは毛皮の服に身を包んで、槍と盾を持ち、女性メンバーは子供を皮布で背負って、太鼓や足鈴を鳴らしながら登場した。

最終審査で選ばれたのは、マケテ県における宣教の歴史と業績を賛えたスワヒリ語の歌と、キリスト教徒としての強い信仰心を語ったキング語の歌を自作自演した聖歌隊であった。彼らの歌が公用語であるスワヒリ語と部族の言葉であるキング語によって歌い分けられ、さらに太鼓が使われたことは、特に注目すべき点である。教会でのキング語と伝統的楽器の使用はそもそも禁止されていたが、近年になり、徐々に教会の方針が緩和されて、日曜礼拝の牧師の説教にキング語が使われるようになってきている。しかし、若者中心の聖歌



筆者撮影

隊では、キング語の歌が歌われたり、太鼓やその他の伝統的楽器が使われることは少なかった。ところが、今回の選考会で彼らはキングの太鼓を復元して、伝統的な踊りのステップを習得し、キングの伝統文化を教会音楽として発表したのである。最終選考会の当日、男はカーキズボンとTシャツ、女はお揃いのカンガとTシャツという服装で、彼らは教会に集まった大観衆の前で歌い踊った。彼らの歌が始まると、人々は壁を振動させるばかりに熱狂的な歓声を上げ、キング人の輝くべきキリスト教の歴史を百年祭にやってくる人々に知らせることができると言った。

3 民族意識と教会エリート

この百年祭参加行事に見られる一連の現象には、キリスト教徒に芽生えた民族意識の高まりと、キング人のアイデンティティ形成の試みを読み取ることができる。植民地時代には、キング人は政治経済的に無力な人々であると見なされていた。

植民地政府の報告書は、地域発展事業や学校教育におけるキング人の消極的な態度を挙げて、キング人を“原始的人々”とか“進歩の遅い人々”と表現している。タンザニア独立後、キング人の住む山岳地域はその寒冷多雨という自然環境のために、道路、電気、通信設備などのインフラ建設が進まず、経済発展における周辺地域との格差が顕著であった。その結果、キング人は“非近代的な貧しい人々”であるという一般的認識が広まっていた。キング人は、こうした彼らに対する外部からのネガティブな評価を十分に意識してきた。そうした状況の中、1981年にルーテル教会の南中央管区がキング人の土地に設立され、キング人の司祭長が任命されたことは、キング人のイメージをかえる重大な出来事であった。というのも、南中央管区の設立は、全国的世界的組織であるルーテル教会においてキング人の存在を明らかにするものであったからである。百年祭において、キリスト教化の歴史を歌で語り、自らの伝統を大勢の聴衆のまえてアピールしようとしたキング人キリ

スト教徒の意気込みは、彼らに与えられてきたネガティブなアイデンティティーを立て直そうとする民族意識の表われであると思う。

ここで、キングの民族意識の形成が、キリスト教徒という集団と重ね合わされて起こってきた背景に、キング社会でのキリスト教徒の増加と教会エリートの出現があることを指摘しておきたい。キング人は、キリスト教を近代化の象徴と見なしており、キリスト教への改宗者は年ごとに増えている。そうした状況の中で、マケテ県外の中学校や専門学校で教育を受け、南中央管区の教会の事業に携わることで社会的発言力を増してきた若い教会エリートが現われている。彼らの多くは、キング社会の外での経験を通してキングという民族をより強く意識しており、全国規模で組織されたキリスト教会が、キングのアイデンティティーを主張する場となりうることに気づいている。そのことは、こうした若いエリートたちが、百年祭への聖歌隊参加において、歌の作詩作曲や演出を積極的に指導し、キリスト教徒であるキング人としての意識を高めることにおおいに貢献していたという事実からも推察できる。

さらに、こうした若手教会エリートたちを中心としたキング人のアイデンティティー模索への動きは、キリスト教に対するキング人の関わり方にある変化をもたらした。百年祭の代表に選ばれたキング聖歌隊は、伝統文化を強調しつつ、キリスト教に対する堅い決意を歌って、“キングらしさ”と“キリスト教徒らしさ”を表現していた。キリスト教会という宗教コミュニティでキング人のアイデンティティーと地位を確立するということは、キングの民族性を主張してゆくと同時に、キリスト教徒としての強い価値観と道徳観を示してゆくことである。百年祭に前後して、若い教会エ

リートたちのリーダーシップのもとにキリスト教を考えるための集会在各教区で開かれるようになった。現在、かなり多くのキリスト教徒がこれに参加し、教義の解釈やキリスト教徒としての道徳的生き方について議論がなされている。アフリカの教会では、土着信仰への継続的依存や、一夫一婦制に対する不理解がしばしば問題となってきたが、集会では、特にそうした問題に関しても伝統的信仰とキリスト教を比較したり、また伝統的宗教観を用いながらキリスト教教義について議論することで解決しようとしている。最近のキング社会にみられるキリスト教徒たちのこのような試みは、キリスト教が、キングの文化として浸透しつつあることを示唆している。

おわりに

キング社会でのキリスト教への改宗の始まりは、ウキングの中でのクラン間の権力闘争という地域的問題と深い関係があり、社会的原因が顕著にみられた。タンザニアの独立やルーテル教会・南中央管区の設定を経て、近年のキング人の改宗から、そうしたクラン間の争いの影は見られなくなっているが、改宗はキング人のアイデンティティーの問題として、その社会性をますます強めている。百年祭の出来事は、キリスト教改宗者たちがルーテル教会という世界的組織を通じて、民族や国という境界線を越えたグローバルな視野を意識し、その結果、彼らの民族としてのアイデンティティーが形成されつつあることを象徴していた。今後、キング人が、どのように教会の中央組織と関わりながらキング社会のキリスト教化を発展させてゆくのか注目したい。

(こいずみ・まり／民族学振興会)